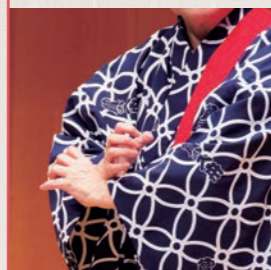
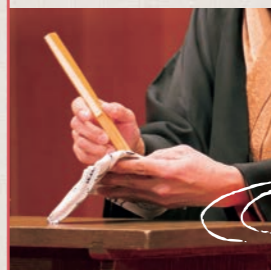


もつと身近に伝統芸能

豊中には、能や落語の他にも
 伝統芸能や大衆芸能の様々な分野で活躍する人がたくさんいます。
 観るもよし、仲間として参加するもよし、気軽に伝統芸能に親しんでください。



命の響きがする楽器

村下正幸さん(和太鼓・津軽三味線・篠笛奏者 上野西)

父親が立ち上げた和太鼓サークルに小学1年生から参加していた村下正幸さん。中学校の文化祭で同級生と一緒に太鼓を演奏した楽しい思い出が、これまで活動を続けてきた原動力です。高校では和太鼓部に所属して創作太鼓に魅了されました。

蓮風のパートナーである友岡宣仁さんは大学時代からユニットで活動し、地域の催しなどに出演してきました。現在、一番力を入れているのが学校公演。平成28年(2016年)は近畿を中心に約40校で公演しました。そこでは、日本の伝統楽器の多くは、生き物の命の生まれ変わりであることを伝え、木を伐り出すところから始まり、牛の革を張る太鼓づくりの様子をていねいに紹介します。

「命をテーマにした活動に行き着いたのは、佐渡島を拠点に世界で活躍する太鼓芸能集団『鼓童』での研修体験がきっかけです。太鼓の技術だけでなく、昔ながらの米作りや釣った魚を自分で捌く調理体験を通して、自然への感謝と命の営みの循環を実感。さらに能、狂言、茶道の所作から伝統に培われた精神を学びました。蓮風の活動を通して子どもたちに命の営みを伝えていきたいと思ったのです」。

太鼓に加えて高校時代から津軽三味線を習い、さらに篠笛も演奏する村下さん。和楽器の音色に魅せられ、一人でも多くの人に和楽器に親しんでもらいたいと話します。



友岡宣仁さん(左)との二人弾き。



和太鼓・津軽三味線を使った路上パフォーマンスからスタート。平成15年に和奏ユニット「蓮風 RENPU」を結成し、平成21年より本格的なプロ活動を開始。樹齢約250年の大木で作られたくり抜きの大太鼓(胴直径1m26cm)の迫力ある響き、力強い津軽三味線の二人弾き、繊細な音色の篠笛と、多彩なパフォーマンスで活躍中。

「学びの機会を提供」

学校公演に際しては、太鼓ができるまでの写真と解説をまとめた資料を事前に貸し出して、子どもたちの理解が深まるよう支援します。公演当日は、子どもたちが実際に楽器に触れながら学ぶ時間を設けています。

太鼓楽器店から写真の提供を受けて、村下さんが自作した資料。写真提供：株式会社浅野太鼓楽器店



三味線、太鼓の革、革が張られていない和太鼓のくり抜き胴を展示。



公演終了後子どもたちは自由に楽器に触れて手触りや重さを感じる体験をします。



寄席三味線、期待の新星

高校で芸能文化科に学び、芸術大学に進学した岡野鏡さん。演劇の道をめざしていましたが、高校で習った落語にひかれて落語会に足を運ぶうちに、^{はな}断の世界を一緒につくる寄席三味線方になりたいと高橋まきさんに弟子入り。2年間の修行期間中は、師匠宅に毎日通い、三味線の稽古だけでなく、朝から晩まで生活を共にしてきました。「三味線の技術だけでなく、言葉遣いなど日常の振る舞い一つひとつに至るまで指導してもらえたことは本当にありがたいことです」。思うように弾けなくて落ち込むことはあるけれど、「辞めたいと思っただことは一度もない」と。今では落語会で弾く機会も増

岡野鏡さん(寄席三味線方 岡町)

えて、一緒に舞台をつくる喜びをかみしめています。「今はまだ、教えられた通り弾くのには精一杯。これから本当の勉強です」と話すのは師匠の高橋まきさん。「基本を学んだ上で、様々な芸能を吸収し、向上心を持ち続けることが必要。芸事には、これで良いということはありません」。若手のホープとして、岡野さんの出番は順調に増えていきます。「もっと断の雰囲気や場面に合わせて弾けるようになりたい」と。落語の奥深さが垣間見え、さらに落語が好きになりました」と笑顔がほころびます。

寄席三味線は細棹を用い、明るく華やかな弾き方が特徴です。



「三味線を習いたい」とツイッターでつぶやいたところ、母親の知り合いで、高橋さんの夫でもある落語家の桂九雀さんからメッセージが届き、入門につながりました。高座を盛り立てる三味線の大切さを知る九雀さんは、高橋さんとともに岡野さんの成長を見守っています。



高橋まきさんは、桂九雀さんの落語会に通うようになったことが縁で、寄席三味線のかつら枝代さん(桂枝雀夫人)に弟子入り。弟子をとり、育てる立場になったことで、かつて自分が師匠から受けたご恩を実感することになりました、と話します。



芸で「心」を伝えたい

旭堂南北さん(講談師 西泉丘)

プロ講師となつて35年の旭堂南北さんは、芸人をめざして漫才の勉強をしていた時、師匠の横山ノックさんに勧められ、講談師への転向を決めました。

「講談は明治時代大変盛んで、そのころの作品が今も演じられています。当時は講談師の口演を速記して新聞に連載したり、講談本を出版したりするなど、大衆文化として人気を博していました。」

駆け出しのころ、旭丘団地で始めた小さな寄席をきっかけに、地域の集まりなどにも呼んでもらい、豊中の人に支えてもらったと振

り返ります。

物語を聴いて場面を想像する楽しさが語り芸の醍醐味。そこに人の情や生きる道を説くのが講談。芸とは「心」を伝えるものという南北さんは、広島出身者として原爆を語り伝えていきたいと、毎年8月に伝統芸能館で開催される「旭堂南北一人語りひろしま」をライフワークとしています。



昨年の第62回豊中芸人倶楽部寄席で口演する南北さん。豊中在住の芸人が集まり、「豊中芸人倶楽部」として20年前から活動。今では伝統芸能館の人気の寄席です。

ねじり鉢巻、粋でいなせな「かつぼれ」

櫻川昇后さん(櫻川流 江戸芸かつぼれ師範 服部本町)

大阪・住吉大社で五穀豊穣を願った「住吉踊」(国重要無形文化財指定)に端を発し、江戸の寄席芸、お座敷芸として発展した

「かつぼれ」。もとは太鼓持ちの踊りなので、リズム感があって、場が盛り上がりやすい。踊る人も観る人も楽しく、気持ちウキウキしてきます」と櫻川昇后さん。伝統芸能館を拠点に活動する「江戸芸かつぼれ同好会」を指導しています。地域の集まりで踊りを披露すると、かつぼれ、かつぼれ、と一緒に口ずさむ方も多く、場が和やかに



東京・日本橋や神戸まつりなどのパレードにも参加しています。



伝統芸能館まつりで練習の成果を発表する江戸芸かつぼれ同好会のメンバー。全員がそろうようになるまで1年はかかるとか。